
空の気持ち

くらいしす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の気持ち

【Zコード】

N4474M

【作者名】

くらじしす

【あらすじ】

「カメラは嘘をつかない」

番外編第一弾つわ

ポーカーフェイスの裏側とは？

涼sideでの短編ストーリー

照れ屋な女の子とクールな少年

1・はじめに

空はいつも表情を変えている。

毎日写真を撮っていても飽きない。

同じ晴天でも毎日してここまで違うんだりつか。

カメラを下ろしたら、腕が柔らかいものに触れた。

「う・・・ん。」

あ、先輩もう寝てる。

おでこを触っちゃったけど、ちょっと恥つただけだった。

膝の上にある頭がじゅんと寝返りを打つ。

あべりから落すないで寝返り打てるなんて器用だなあ。

少し短めの髪を撫でてみる。

・・先輩の寝顔つてホント綺麗だ。

最近は綺麗といつなり可愛こと思つようになった。

くつきりと整つた眉毛も、形のいい唇も無防備な寝顔になると可憐くなる。

これで先輩が女の子らしい性格だつたら絶対モテてるの。

普通スカートでねつころがらないよな・・。
めくれても気にしないし、口調も勇ましいし。

この屋上がなかつたら、先輩と関わることはなかつたかも。

「ん・・くはああ。」

起きた。

大口を開けて欠伸をしている。

せめて手で押さえろよ。

おまけに大きく伸びをしている。

まるで猫みたいだ。

キリッとした大きな目も、小さな獣を思わせる。

「涼、膝痛くない？」

「大丈夫。」

いつも載せてるし。

まだ眠いのか、目尻が下がっている。

目を擦つて覚まそうとするが、なかなか目が開かないらしい。

ホント可愛い。

先輩のこいつの行動はよく見ないと発見できない。
さりげなさ過ぎるのだ。

自然体なのだわつ。

そして俺はひいじいじの見えてること

「 - 先輩。」

「 ん?」

「 おはようの、キス」

「 はあつ? - !」

いじめたくな。

先輩は案の定赤くなつてゐる。

俺も恥ずかしくないわけじゃない、でも表情に出ないから優位に立てる。

表情が変わらないって便利だ。

この頃は先輩に見抜かれてる気がしなくもないけど。

「 そんなことはしなくていいつ。」

後ろを向いてしまつた。

それでも、可愛い。

「 嫌、なんだ。」

「 そ、そういうわけじゃ・・つー。」

振り向いた先輩の口を捕らえる。

耳まで赤くしちゃつて。

「 おはよ、先輩。」
「 おはよ・・。」

ホント慣れないなあ。

- いろんな先輩にも、困られた時はあるんだけじゃね。

つづく。

2・悩み

・・腕が痛い。

今田は先輩に言われて
俺も寝てみることにした。

先輩に腕枕してあげたのまではよかつたんだけど、
先輩は早々に背中を向けて寝てしまった。

寝顔を見るつもりだつたのに、

ただ痛くて自分が寝れないだけになつてしまつた。

酷いなあ

落ち込んでいると、先輩が寝返りを打つた。

何やうむにやむにやうじ聞ひやくや

ちょっと幸せ。

悪戯心で鼻をくいと押してみる。

ほんの少し眉しかめた。

「・・ん・・。」

可愛い。

すると

「ん~・・。」

先輩が半分目を開けた。
やば、起にしちゃつた。

先輩は半田のままぼーっとして居る。

すぐそこにある先輩の目に見つめられ、鼓動がはつきりしてくる。

「・・先、ぱい？」

そう呼ぶと先輩が動いた。

ああやつぱつ起ききて・・

と思つた、その時

「ん~・?ふ・・・ひ。」

先輩が、

先輩に、キスされた。

顔が熱くなるのを感じる。

先輩は俺の肩に手をかけていて、
逃げようにも逃げられない。

息が出来ない・・・ひ。

「んつ・・はあつ、はあ。」

先輩はしじまいくじい、俺を解放すると、
わざわざの半田のまま

「えへへつ。」

と笑つたと思つと、
もぞもぞと動いて俺の腕の中に入つてうずくまり、
再び寝息を立て始めた。
顔の熱が收まらない。

・・まさか、寝ぼけてた・・?

いつもの先輩だつたらこなことしない、
とこづか出来ないはずだ。

・・くそぅ、まさか寝ぼけた先輩に唇を奪われるとば。

帰り道、先輩に聞いてみた。

「先輩、お昼一回起きた?」

「いや?ぐーすか寝てたけど、なんで?」

本当に寝てたのか。
全く覚えてないなんてす”い。

「別に。あ、なんか夢見た?」
「夢なんて一々覚えてな・・」

そこまで言つて先輩の顔は突然赤くなつた。

「お、覚えてないぞ？…」

声が裏返つてゐる。

先輩はバレバレの嘘をついた。

なんて分かりやすいんだ。

「何？どんな夢？」

じつじりと近づくと、先輩は俺を睨んで、

「だ、だから覚えてないって。」

と、怒鳴つた。

もう真っ赤ではないけど田元はまだ赤い。

あんまり追い詰めても可哀相なので、
しばらく見つめて止めた。

お返しはこんなもんでいいだろう。

あの時の唯一の救いは先輩が起きてなかつたことだ。

あんな顔見られたらからかわれるに決まつてゐる。

ふう、とため息をついた。

「どうかしたか？」

先輩が上田づかいに問い合わせてくる。

・・・ううう、顔無自覚なんだろうな。
他の奴にもこんな顔、すんのかな。

「別に。」

言葉と同時に先輩の手を握った。

先輩は嬉しそうな顔をしている。

先輩は俺のことで困ったり、悩んだりするのかな?
そうだといい。

俺はこんなに悩まされるの、先輩だけだから。

十
ふ
い
ん
十

2・悩み（後書き）

一応これで

カメ嘘（？笑）の番外編は終了です。

他に書いて欲しいという人が（いないと思いますが…）

もしいたらつ

言つて下さい

（ ）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

m (· _ ·) m w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4474m/>

空の気持ち

2010年10月10日02時34分発行